

# 「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざして ～学びの見通しと振り返りを大切にしたい授業づくり～

下関市立岡枝小学校

## 1 研究主題について

本校では、平成29年度から、「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざして研修を重ねてきた。その結果、めあての意識化、話し合い活動の活性化、振り返りの充実等により、授業展開を工夫・改善することで、「主体的・対話的な学び」の実現につながるものが成果として示された。しかしながら、「深い学び」については、教師のめざす振り返りの焦点化や、振り返りを生かした学び等、次への学びにつながる振り返りの実践に課題が残る状態であった。

また、電子黒板や1人1台端末の導入により、授業におけるICT機器の活用についても課題となり、一昨年度から「ICT機器の有効活用」を研修の視点に加えてきた。令和4年度は、ICT機器のさらなる有効活用をテーマに、各教科・領域における研修を行い、ICT機器の有効的な活用法を共通理解することができた。児童の興味関心の高まりや学習内容の理解や自己の振り返りにも役立てることができたが、ICT機器の便利な使い方や、ICT機器のより効果的な活用の仕方については、さらなる研修が必要であった。

そこで、本年度は、研究主題を「『主体的・対話的で深い学び』の実現をめざして」とし、学びの見通しと振り返りを大切にしたい授業をサブテーマとして、児童が「何ができるようになるか」の学習の見通しを意識した授業実践に取り組み、発達・学習内容に応じた振り返り、教師がめざす振り返りの焦点化や、振り返りを生かした学び等、次への学びにつながる振り返りの実践に取り組んできた。

## 2 具体的な取組

### (1) 見通しをもった指導計画と効果的な振り返りを授業の中に繰り返し仕組むこと

本年度は、指導計画を立てる場合、この授業で児童が「何が分かったのか」「何ができるようになったのか」を実感したり、整理したりする「振り返り」に注目することとした。そして、「振り返り」や授業中に予想される児童の反応を児童の言葉で考え、検討を重ねていった。その結果、よりねらいが明確化し、手立ても具体的となり、児童の深い学びへとつなぐ一助となったと考える。

また、児童が「振り返る」ためには、学習（本時、単元全体）の見通しをもつことが必要と考えた。教える側だけでなく、学ぶ児童自身が見通しをもつためにはどのような方法があるのか、研修を通して効果的な方法にはどういった仕方があるのかを検証した。これについては、ICT機器を活用した場合やワークシート、掲示物等様々な手法がみられた。見通しのもたせ方として、昨年まではICT機器の活用が多かったが、よりねらいや教師の求める振り返りに合った手法はどれかを検討するよい機会となった。

このように、研究テーマをもとに取組を進めてきたことで、新たな視点に気付かされた。それは、「比べること」である。例えば5年生の音楽科「春の海」の鑑賞では、日本らしさをより理解する手立てとして、箏と尺八で演奏された曲とリコーダーで演奏された曲を聴き比べた。それにより、児童は、より日本らしい音色について感じたり、特徴について考えたりして学びを深めることができた。この視点も、深い学びのためには重要な視点であることを共通理解することができた。また、どの教

科・教育活動においても、毎日の、そして学年の「積み重ね」が大事であることを、本研修を通して、改めて理解することができた。

## (2) ICT機器を有効活用した指導方法

ICT機器の活用は、これからの授業づくりには欠かせないツールの一つであることは理解しており、授業においての成果も上げている。特に、視覚化において、ICT機器の活用はとても有効であった。例えば、電子黒板に、本時の流れや教科書、ワークシートを提示し、学習している部分を拡大したり、色をつけたりして視覚化することにより、どの児童にも理解しやすく、見通しのもちやすさにつながった。

また、タブレット端末を使用することは、個別に学習を進める場合だけでなく全体の学習でもとても有効であることが検証された。例えば、音楽科の鑑賞の学習では、タブレット端末に曲の音源を入れることで、一人ひとりの児童がイヤホンを使って聴きたい箇所を繰り返し聴き、気付きを得ることができた。また、タブレット端末や電子黒板から動画や曲を流す際や曲の一部分を繰り返し聴かせて全体で確認したい時、CDデッキ操作等の手間が省略され、児童の学習意欲もそのままに、曲の部分的な鑑賞が何度も可能となり、ICT機器の利便性も実感できた。他にも、蓄積された写真のデータの振り返り、児童の発表の補助としての活用、録音機能による振り返り、シンキングツールによる思考の明確化等、教員が活用法を提案する中で、ICT機器の活用が授業のねらいを達成するために有効な手立てか、他の方法はないか、と検討や協議を重ね、よりタブレット端末の活用を充実させることができた。また、コンテンツの使用については、どのような場面で、どのコンテンツを使用するのが適切であるかの確認を必ず行うことも共通理解できた。

タブレット端末の活用術や活用例を講師主体の研修だけでなく、各教員間での教え合いや学び合いを通して、より深い学びへとつながる使い方の理解を深め、実践へとつなげることができた。



コンテンツを活用した意見交流

## 3 終わりに

今年度の研究成果として、児童が学びの見通しや振り返りの視点をもつだけでなく、視点の焦点化と日頃の積み重ねが、児童の振り返りの内容を充実させ、深い学びにつながっていくことが共通理解できた。また、教師のめざす児童の振り返りを児童の言葉で表すことで、ねらいの明確化や手立ての具体化にもつながることが分かった。

また、これまで「いつ」「どんな場面」でICT機器を活用できるのかという視点だったが、本研修を通して、深い学びにつながるためには、「いつ」「どのタイミングで」活用するのが最も効果的なのかを、全員で考えることができた。ねらいを達成するために必要なコンテンツの使用では、人権やモラル、信憑性に十分留意して使用することの大切さも合わせて共通理解することができた。ICT機器の効果的な活用法については、今後も教員間同士で情報交換したり、協議したりしていく。

今後、「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、ゴール（振り返り）から逆算する授業づくりだけでなく、より児童の振り返りの内容が充実するとともに、児童の学習意欲を高める振り返りについて考えていきたい。